

問二 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

今は昔、御堂の、大納言にて一条殿に住ませ給ひける時、四月の朔のころほひ、日やうやく暮れ方に

なりけるに、男どもを召して、「御隔子参れ」と仰せられければ、祭主の三位輔親が勘解由の判官にてあ

りけるが参りて、御簾の内に入りて、御隔子を下ろすほどに、南面のこずゑにめづらしくほととぎすの

ひとこゑ鳴きて過ぎければ、殿これを聞こしめして、「輔親はこの鳴くこゑをば聞くや」と仰せられける

に、輔親御隔子を参りさして、突い居て、「承はる」と申しければ、殿、「さては遅き」と仰せられける

に、輔親かくなむ申しける、

（山のほととぎすも人里に慣れて、たそがれどきに自分の名前を名乗るように鳴いていることなあれ）
あしひきの山ほととぎす里なれてたそがれどきになのりすらしも

と。

殿これを聞こしめして、いみじくほめさせ給ひて、表に奉たりける紅の御衣一つを取りて、うちかづ
けさせ給ひつれば、輔親給はりて、臥し礼て、御隔子を参りはてて、御衣を肩にかけて、侍に出たりけ

れば、侍どもこれを見て、「これはいかなる事ぞ」と問ひければ、輔親ありつる様を語りけるに、侍ども

みな聞きて、いみじくほめののしりけり。

（注）御堂・殿＝藤原道長のこと。

大納言＝大臣に次ぐ地位の役人。

一条殿＝藤原道長の邸宅。

御隔子＝格子。細い角材を縦横に組み合わせて作ったもの。

祭主＝伊勢神宮の神官の長。

勘解由＝勘解由使という役職の略。

御簾＝貴人の部屋にあるすだれ。

侍＝侍（貴人のそばに仕える人）が詰めていた「侍所」の略。

（「今昔物語集」から。）

(ア) —線1「さては遅き」とあるが、「道長」はどんなことに対して遅いと言っているのか。最も適するものを次の中から一つ選び、その番号を書きなさい。

1 ほととぎすの鳴き声が聞きたくて格子を下ろすのを止めているのに、ほととぎすがなかなか鳴かないこと。

2 「輔親」にほととぎすの鳴き声を聞いたかどうかを尋ねているのに、「輔親」がなかなか答えようとしないうこと。

3 ほととぎすの鳴き声を聞いたにもかかわらず、「輔親」がほととぎすを題材にした和歌をなかなか詠ま^いないこと。

4 格子を下ろすときに鳴いていたほととぎすはもう飛んでいったのに、「輔親」がなかなか格子を下ろさないこと。

(イ) —線2「これはいかなる事ぞ」とあるが、「侍ども」はなぜこのように言ったのか。最も適するものを次の中から一つ選び、その番号を書きなさい。

1 「輔親」が、格子を下ろすときに和歌を詠んだから。

2 「輔親」が、「道長」のお召し物を肩にかけて出てきたから。

3 「輔親」が、「道長」に向かつてはつきりと意見を述べたから。

4 「輔親」が、「道長」にかわいがられていることを自慢したから。

(ウ) —線3「侍どもみな聞きて、いみじくほめののしりけり。」とあるが、「侍ども」はどんなことをほめたたえたのか。最も適するものを次の中から一つ選び、その番号を書きなさい。

1 「道長」に無茶な要求をされた「輔親」が、和歌の中で暗に「道長」を批判したこと。

2 「道長」が和歌に詳しくないことにつけこんだ「輔親」が、高価な品物を手に入れたこと。

3 「道長」に和歌を詠むように促された「輔親」が、優れた和歌を詠んでほめられたこと。

4 「道長」の横暴をいさめた「輔親」が、結果的に「道長」の信頼を獲得したこと。

(エ) 本文の内容と一致するものを次の中から一つ選び、その番号を書きなさい。

1 「道長」は、「輔親」がすばらしい和歌を詠んだことに感心し、自分の着ていたものをほうびとして与えた。

2 「輔親」は、ほととぎすの鳴き声を実際には耳にしなかったが、「道長」の機嫌をとるためにうそをついた。

3 「侍ども」は、「道長」の命令に従わずに風流の心を優先させて和歌を詠んだ「輔親」の態度に感心した。

4 「輔親」は、格子を下ろす時間にほととぎすが鳴くことを知っていたが、そのことを「道長」には黙っていた。

問二 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

むかし、天智天皇と申すみかどの、野にいでて鷹狩せさせ給ひけるに、御鷹、風にながれてうせにけり。むかしは、野をまもる者ありけるに、召して、「御鷹うせにたり、たしかにもとめよ」と仰せられければ、かしこまりて、「御鷹は、かの岡の松のほづえに、^{（上のほうの枝）}南にむきて、しか待る」と申しければ、おどろかせ給ひにけり。「そもそんなぢ、地にむかひて、かうべを地につけて、ほかを見る事なし。²」いかにして、こずゑにゐたる鷹のあり所を知る」と問はせ給ひければ、野守のおきな「民は、公主におもてをまじふる事なし。しばのうへにたまれる水を、かがみとして、かしらの雪をもさとり、おもてのしわをかぞふるものなれば、³そのかがみをまばりて、御鷹の木居を知れり」と申しければ、そのち、野の中にたまれりける水を、野守のかがみとはいふなり、とぞいひつたへたるを、野守のかがみとは徐君^{（注）}がかがみなり。そのかがみは、人の心のうちをてらせるかがみにて、いみじきがみなれば、よの人、こそぞりてほしがりけり。これに、さらに我持ちとげじと思ひて、塚のしたにうづみてけりとぞ、またひと申しける。いづれかまことならむ。

（「俊頼髓脳」から。）

（注）徐君＝中国の故事に登場する人物。

（ア）——線1「御鷹うせにたり、たしかにもとめよ」とあるが、その意味として最も適するものを次の

中から一つ選び、その番号を答えなさい。

- 1 御鷹が盗まれてしまった、間違いなく取り返せ
- 2 御鷹が隠されてしまった、間違いなく返してもらえ
- 3 御鷹がいなくなってしまった、間違いなく探し出せ
- 4 御鷹が死んでしまった、間違いなく新しい鷹を探せ

（イ）——線2「いかにして、こずゑにゐたる鷹のあり所を知る」とあるが、その意味として最も適するものを次の中から一つ選び、その番号を答えなさい。

- 1 どうやって、松の木のこずえにいる鷹の居場所がわかるのか
- 2 どうにかして、松の木のこずえにいるはずの鷹の居場所を知らせよ
- 3 どうすれば、松の木のこずえにいた鷹を手に入れられるのか
- 4 どうして、松の木のこずえから鷹がやってきたとわかったのか

(ウ) 線3「そのかがみをまぼりて、御鷹の木居を知れり」とあるが、その説明として最も適するものを次の中から一つ選び、その番号を答えなさい。

1 「みかど」が、「野守のおきな」のように自分の鏡を持っていれば、木の上の鷹の様子を知ることができたということ。

2 「みかど」が、自分の鏡を大切に手入れしていたので、木の上の鷹の様子を映すことができたということ。

3 「野守のおきな」が、水たまりに顔を映して見ていたら、たまたま木の上の鷹の様子が映ったということ。

4 「野守のおきな」が、水たまりを鏡代わりにして上のほうを映し、木の上の鷹の様子を知ったということ。

(エ) 本文の内容と一致するものを次の中から一つ選び、その番号を答えなさい。

1 「みかど」に呼び出された「野守のおきな」は、不思議な鏡を使って「みかど」の心の中をこっそりのぞこうとした。

2 「みかど」は、頭を地面につけたまま一度も顔を合わせようとしない「野守のおきな」を見て、うそを言っていると思った。

3 「徐君」は、野の中にたまっている水を「野守のかがみ」と呼ぶようになったいきさつを、「みかど」に詳しく説明した。

4 人の心を映し出せる「野守のかがみ」を人々があまりに欲しがったので、「徐君」はそれを墓の下に埋めたといわれている。